

道徳の教科化に向けて

校長



向寒の候、保護者の皆様におかれましては、お変わりなくお過ごしのことと思います。先日の日曜参観日には、

多数の保護者、ご家族の皆様方にご来校いただき、誠にありがとうございました。当日は、真剣なまなざしで授業に取り組むお子様の姿をご覧になられたことと思います。また、保護者の会が開催して下さったバザーでは、子どもたちが買い物体験等で楽しいひとときを過ごすことができました。多大なるご協力を賜りました保護者の皆様方に、心から感謝とお礼を申し上げます。

さて、小学校では平成30年度、中学校では平成31年度から道徳の時間が教科となり、教科書が配付され、評価も始まります。評価については数値で評価するのではなく、児童の良さを積極的に認めていく記述式となります。保護者の皆様も道徳の時間の授業を受けてこられたことと思いますが、どのような授業だったか覚えていませんか。

今回、道徳の時間が教科となった背景には、文部科学省のメッセージにもありますように、いじめ問題への対応があります。道徳の時間だけでなく、学校のすべての教育活動を通して道徳的価値観を養っていくことが求められています。道徳の時間で学ぶ価値内容は、学習指導要領に示されていますが、さまざまな道徳的価値に対して「自分のこととして考える」「これからの自分の生き方について考える」ことが必要です。たとえば、「きまりを守る」という価値に対して、「きまりはなぜあるのか」「きまりを守らなければいけないのか」「きまりがなければどうなるのか」「きまりだから守るのか」と多角的に考え、さらに「自分はどうか」「それでよかったのか」「これからはこうしていこう」と自分の生き方に結びつけていくことが大切です。そのために、子どもたちが自ら考え、議論していく授業づくりが求められており、本校でも「自他のよさを認め合い、ともに高め合う心豊かな児童生徒の育成」を研修主題として、全職員参加による研修授業を実施し、授業改善に努めているところです。

議論する力を高めるためには国語の時間、学級会の時間等、日々のさまざまな場面で訓練していく必要があります。道徳の時間の議論とは、1時間の授業のねらいとする価値にせまるため、また、よりよ

い価値観に気付かせるために行うことが大切です。主人公や自分自身の葛藤の裏にある価値観の高低、他の価値とのかかわりなど、多様な考えを議論することで、「そういうことか」「その考えはすばらしいな」「自分ではできなかったな」「よしこれからやってみよう」と自己を見つめ、道徳的な判断力や実践力が高まっていくことを期待したいものです。学年の発達段階に応じて、ペアでの話し合い、グループでの話し合い、ディベート的手法による話し合いなど、議論させる形態も工夫して、子どもたちが自由に議論できるよう、充実した授業づくりに努めていきます。

非常時一斉引き渡し下校訓練

10月11日(水)に、「非常時における一斉引き渡し下校訓練」を実施いたしました。本校は外国にあることから、積雪や悪天候時への備えとともに、近隣国や英国でも発生しているテロ関係の事案もふまえ、「緊急かつ安全な下校」の対応訓練が大変重要です。今回は、保護者の皆様のご協力により、短時間で下校ピックアップの全校シミュレーションを実施することができました。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

支えるという仕事

10月16日(月)、外交官の蒲池早織さんをお招きし、進路講演会を行いました。現地にいる邦人のサポートから政府要人の外遊に際する各種手配まで、多岐に渡るお仕事を担当する蒲池さんは、これまでにアフリカや北欧での勤務も経験されています。



講演会では、各地での体験談や、お仕事に対する考え方等についてお話ししてくださいました。特に印象的だったのは、外国で仕事をするう

えで最も大切なことが「日本語の力を鍛えておくこと」と「自国について知っておくこと」だというお話です。「国語を頑張っておきたい」というご助言や、ご自身が今でも中学時代の歴史の教科書をお持ちだということからも、「日本人」として海外で活躍するためには、小・中学生時代をしっかりと過ごし、その基盤を築いておくことが重要であるということが強く実感されました。児童生徒にとって、世界を舞台にご活躍されている蒲池さんの姿は、夢を叶えるための大きな指針となったことでしょう。

文化祭を終えて

全信全励 ～我らがつなぐ この瞬間～

9月30日（土）に第41回ロンドン日本人学校文化祭の保護者公開を行いました。今年度のスローガンは「全信全励 ～我らがつなぐ この瞬間～」です。小学部のアイデアで、四字熟語の漢字を文化祭らしい文字に置き換えました。今年度は、運動会が夏休み直前に開催されたため、サブスローガンの話合いや原稿作りなどが、運動会の練習と一部並行しながらの活動となりました。しかし、中学部生徒会がリーダーシップを発揮し、全体を引っ張ってくれたおかげで、準備をスムーズに進めることができました。当日の係ごとの活動も、子どもたちの今までの経験が生かされていて、効率的に手際よく動いている姿が印象的でした。それぞれの学年の劇や演奏、合唱も工夫を凝らしたものでした。ステージ協



で進行していた私は、リハーサルの時から何度も発表を見る機会がありましたが、子どもたちの一生懸命な姿に毎回感心させられました。当日ご来場いただきました保護者の皆様から温かい拍手をいただき、子どもたちも達成感いっぱいの感動あふれる文化祭となりました。文化祭で学んだ、協力や助け合いの気持ちを、今後の学習活動に生かしてほしいと思います。

しんせつせんたい1ネンジャー

小学部1年生

小学部1年生は「しんせつせんたい1ネンジャー」を元気いっぱいに演じました。夏休みから台本の音読練習を始め、2学期の練習では物語を全部暗記している児童もいて、とても意欲を感じました。

初練習では、舞台から見える景色を一人ひとりに体験させました。舞台の上に立つと「えー、ここで演技をするの。できるかな。」と不安そうな声が聞かれました。緊張からか、舞台の上に立つと、正面を向いてせりふを言ったり、せりふをゆっくり言いながら動きをつけたりすることが難しく、繰り返し練習をしました。時には、お互いに演技を見合い、上手なところ、工夫した方が良いところを、アドバイ

スしました。友達から演技を褒めてもらえることは、子どもたちにとって大きな励みになり、舞台上でも堂々と演技ができるようになりました。

本番では、練習の成果を出し切って、生き生きと演技をした1年生。演技終了後は「楽しかった。」「たくさんの拍手がもらえてうれしかった。」「もう一回やりたいな。」と喜びの表情を浮かべ、達成感を感じていました。上級生や保護者からいただいた大きな拍手は、子どもたちのさらなる自信につながったようでした。



みんなで創った文化祭

小学部2年生

小学部2年生は、「ヒュードロンおばけ学校」を発表しました。おばけは怖いイメージがありますが、2年生の子どもたちは、おばけ学校のおばけたちをととてもかわいらしく演じました。

2年生の練習での合言葉は、「みんなで創る」でした。最初はなかなか大きな声を出せなかった子も、友達のがんばりに刺激を受けて、徐々に声が出せるようになり、自信を深めていきました。場面ごとの練習では、どうしたら様子が表現できるか友達同士でアイデアを出し合い、工夫している姿が見られました。一人では困難なことも、みんなで協力することで乗り越えることができました。



ドキドキワクワクした気持ちで臨んだ発表本番では、練習したことを存分に発揮し、楽しみながら演じる子どもたちの姿がありました。舞台の上で、精一杯役になりきって演技をする子どもたちは、みなキラキラと輝いていました。

この文化祭を通して、子どもたちは「一生懸命がんなる楽しさ」や「みんなで一つのものを創る喜び」を体験することができました。文化祭での経験は、今後の生活の中で生かされることでしょう。これからも、2年生みんなで力を合わせてがんばっていきよう指導していきたいと思ひます。

「優しさや思いやり、感謝」の 気持ちをもって

小学部3年生

「この劇で伝えたいことは何だろう？」何度も子どもたちに問いかけてきたことです。初めは、「え、何だろう。」「優しさ…かなあ。」と自信なさげに答えていた子どもたちを覚えています。練習開始当初は、自分のせりふを言うことに精一杯で、声が小さかったり、動きが単調で、まとまりがなかったりしました。しかし、互いに励まし合ったり、演技が上手になってきたことを喜び合ったりしながら、子どもたちは練習に取り組んでできました。その姿は、温かな心で助け合う、劇中のマジョリンや人間たちのようでした。そして、仲間と協力し合いながら劇を創りあげるという経験を通して、子どもたちは、この劇で伝えたいことを、自信をもって言えるようになりました。それは、劇中の言葉にもある「優しさや思いやり、感謝」の大切さです。



文化祭当日は、一人ひとりが役になりきり、堂々と演技することができました。

最後の「心から心へ」の歌は、これまでの子どもたちの頑張りの集大成。仲間と助け合う「優しさ」や「思いやり」、仲間や見てくれているお客さんへの「感謝」の気持ちを伝えようと、みんなで心をついに、一生懸命に歌いました。

劇の練習を通して学んだ「優しさや思いやり、感謝」の心を大切に、これからの学校生活を送ってくださることを願っています。

安心してください。 努力は裏切りませんから！

小学部4年生

「安心してください。努力は裏切りませんから！」小学部4年の劇「セロ弾きのゴーシュ」でのせりふです。主役のゴーシュが音楽会に向け、セロの練習を重ね大成功するという物語です。

4年生は全員が舞台上に立ち、一つ以上のせりふを自分なりに精一杯表現しました。はじめは踊りが合わなかったり、歌の音程がずれていたりと、せりふのタイミングが違っていたりしたので、本番の舞台に立つまで数えきれないぐらいの練習をし、努力を重ねました。また、登場人物の気持ちを、各グループや学年で一体となって表現することは本当に難しく、

場面や言葉の意味、それに込められた作者・宮沢賢治の思いを深く読み取り、共有することが必要でした。練習の途中で涙を見せる子、グループ内で意見がぶつかり合う子もいましたが、当日は友だちの励ましと本人の自己最高のがんばりが組み合わさり、学年全体が一つになることができ、舞台の上で一人ひとりが輝くことができました。

ゴーシュのように大成功した子どもたち。この文化祭を通じて、努力は裏切らないこと、仲間と協力することの大切さなどを学びました。これらを今後の学校生活に生かしていきます。



♡ 愛で結ばれた「すてきな仲間」♡

小学部5年生

小学部5年生は、「嵐の中の子どもたち」を披露しました。「希望と勇気をもって取り組むことの素晴らしさ」や「仲間を信じることの大切さ」を届けたいという想いで練習に励みました。幕ごとの場面の様子がどのように演技するとより伝わるのか。せりふの言い方や動作を互いに何度も確認し合いました。また幕同士をつなげ、一つの作品として観たときに、観客の心を魅了できるような劇になっているのかを、自分たちの演技をビデオに撮り客観的に観ました。そして、自分たちで考えられる改善点を修正するなど、練習に練習を重ねて文化祭本番を迎えました。

その結果、文化祭当日は努力が実り、今までで一番の劇に仕上がりました。舞台上はもちろんのこと、舞台袖でも演技している友達を温かく見守っている仲間がいました。「希望」の歌の場面では、舞台袖の子どもたちも一緒にタイミングで立ち上がり歌っていました。また、舞台から降りて来た友達に「良かったよ。」と声をかけたり、ハイタッチをしたりして、成功した喜びをともに分かち合っていました。みんながつながり、心をついにできたからこそ大成功した文化祭。今後もこの経験を生かし、互いに支



え合い心を通わせ合っていくことで、さらに「すてきな仲間」へと成長してほしいと思います。

小学部最高学年としての務め

小学部 6年生

自分たちの発表が終わったとき、子どもたちは、何か安心したような表情をしていました。きっと小学部最高学年としての劇を見せないといけないという責任感や使命感から解き放たれたのでしょう。また、思いっきりやりきったという充実感・達成感から溢れ出る笑顔は、キラキラと輝いていました。

6年生は、他の小学部の学年と比べて人数が少なく、34名しかいません。私は、「この少ない人数で、他学年に負けない迫力ある演技や合唱ができるのだろうか。小学部最高学年としての務めが果たせるのだろうか。」と悩んでいたことがありました。ある日、子どもたちに、この不安な気持ちを正直に話したことがあります。すると、「一人ひとりが2倍、3倍の声を出せばいい。先生、大丈夫です！」と、自信満々に答えてくれました。なんと頼もしい子どもたちでしょう。私は、口では「全信全励」と言いながら、完全には子どもたちを信じられていなかったのだと深く反省しました。文化祭本番では、子どもたちは互いを信じ合い、いつもの何倍もの声を出して、一人ひとりが輝く姿を見せてくれました。それは、小学部最高学年としてふさわしい堂々とした演技でした。

文化祭を通して、小学部最高学年としての自覚の高まりや互いを信頼し合う



こと、自分たちでより良いものを創っていくことなど、たくさんの成長が見られました。この行事で学んだことを、今後の教育活動に生かしていきたいと思います。

世界に架ける虹の橋

中学部

「東京の中学校に英国から帰国した篠原理恵が転入してきました。『帰国子女』の理恵に対し様々な思いが交錯する教室の中で、クラスのみんなは文化祭に向けての活動を始めるのですが…。」

このアナウンスと共に、今年度の中学部劇「世界に架ける虹の橋」は幕を開けました。

理恵とこの学級の生徒は、すれ違いや衝突を経験しながらも、クラス展示のテーマである「マララ・ユスフザイさん」の考え方や活動について理解を深めていきます。その中で、生徒が自身を見つめ直し、



他者を尊重し理解していくことの大切さに気付いていくというストーリーです。

文化祭に向けての取組は、7月、運動会の取組がピークを迎えた頃に始まり、2学期開始と同時に

本格化しました。中学部の生徒は、朝の合唱練習、中休みの演出係会議、昼休みのキャスト練習、そして帰る前の合唱練習…と、毎日の日課を精力的にこなしていきました。感心したのは、自分たちで課題を見つけ、それを自分たちで解決していこうとする生徒のたくましさです。中休みの会議で出た様々な案を、リーダーがキャストや各係の生徒に伝え、それをみんなで昼休みやステージ上での練習に反映させていくというサイクルをしっかりと機能させている姿を目にするたび、中学部生徒のもつ力の大きさを改めて実感しました。

こうした活動の集大成が、本番の舞台で見事に花開いたことは、終演後の紅潮した清々しい生徒一人ひとりの笑顔が何よりも物語っていたと思います。



86名全員で劇を創りあげていく過程は、まるで、小さなピースを一つひとつはめていくパズルの作業のようでした。たった1ピース欠けても完成しないパズルのように、一人でも欠けると中学部の活動は成立しないということを生徒自身が強く実感できたことも、今回、中学部として得られた大きな収穫の一つです。中学部の生徒には、これからも互いに支え協力し合いながら、さらなる飛躍を遂げられる仲間であってほしいと思います。